

令和 4 年 5 月 22 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02319

研究課題名(和文) 日本における綴織の再興と展開に関する基礎研究

研究課題名(英文) Fundamental Research on the Development of Tapestry Weaving in Japan

研究代表者

吉田 雅子 (Yoshida, Masako)

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授

研究者番号：40405238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代後期から戦後までの綴織の発展の流れの中で、ターニング・ポイントとなった三つの時期の作品の材質・技法・表現と外来要素の受容がどのように関連していたかを明らかにすることを、本研究は目的としている。そして、(1)江戸後期、(2)明治から昭和初期、(3)第二次大戦後の3つの時期を代表する作例や制作者を一次史料、現物資料、作家へのインタビューを通して調査した。(1)では中国、日本、フランドル、(2)は中国、日本、フランス、(3)は日本、ヨーロッパ、イスラム圏、アンデスの要素が選択的に混交されながら作品が制作された様態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

綴織の展開は日本の染織史の上で重要な問題で、年紀が付随する江戸後期の綴織は日本の祭礼に複数伝来しており、それらはこの分野における基礎研究として大変重要である。しかし、これらに関連する一次資料に関する学術的な調査はあまりなされておらず、これらの祭礼に伝来する品々は研究者には手が届かないことが多かった。本研究はこのような重要な作例を含むもので、この種の作に関する基礎的研究基盤を提供するものとして価値がある。本研究は日本の織物発展史のみならず、工芸の国際文化交流史の上でも意義を有している。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify how the materials, techniques, expressions, and foreign influences were intermingled in the three phases, which became the turning points in the historical development of tapestry weaving from the late Edo period through the WWII postwar period. Through the examinations of primary sources and extant objects, as well as interviews with the artist, this research explored the tapestry weavings of three important phases: (1) the late Edo period, (2) the Meiji through early Showa period, and (3) the post-World War II period. This research helped clarify the aspects of the eclectic creation of the following various cultures: China, Japan, and Flanders in phase (1); China, Japan, and France in phase (2); and, Japan, Europe, Islamic countries, and the Andes in phase (3).

研究分野：工芸史

キーワード：綴織 染織史 工芸史 日本 中国 ヨーロッパ

1. 研究開始当初の背景

綴織は日本の染織品を代表する織物の一つであり、日本染織史において極めて重要な品だが、日本におけるその成立や展開はさほど明らかになっていない。日本における綴織の現存作例は、古いものでは7-8世紀の作が数点伝来しているが、これらの品が日本製であるか中国製であるかは諸説あって確定をみていない。その後の綴織の現存作例で明らかに日本製と判断できるものは、時代がかなり下った江戸時代の品となる。本研究で考察対象とするのは、このような江戸時代以降の日本製の綴織である。

江戸時代の綴織に関しては少数の論文があるものの、今までほとんど詳しい調査がなされてこなかった。また明治期の綴織は、外来要素を取り入れて制作がなされたことが明らかになっているが、このような側面に関してはさらなる考察が可能と思われる。そして昭和初期や第二次大戦後の綴織に関しては、カタログの作品解説や作品紹介的な論述がその多くを占めているのが現状である。このように今まで研究の蓄積が少なく、時代ごとの枠組みの中で別々の事象として扱われてきた綴織の作品を、俯瞰的な視点から捉え直し、その変遷や外来要素の受容と展開の様態の一端を明らかにしたいと考えるに至った。

2. 研究の目的

江戸時代後期から戦後までの綴織の発展の流れの中で、ターニング・ポイントとなった三つの時期の作品を調査し、材質・技法・表現の特徴を考察し、それらと外来要素の受容がどのように関連していたかを明らかにすることを、本研究の目的とする。第一期は、外来綴織の影響を受けて日本で綴織が形成された江戸後期、第二期は、外来要素を取捨選択して美術織物としての綴織が形成されていった明治から昭和初期、第三期は、欧米の動向に触発されて新たな造形を展開した第二次大戦後である。本研究では綴織に焦点を絞り、従来の時代区分を貫通する長い時間枠を設定して三つの時期の綴織の変遷を導きだし、日本における異文化の受容とその展開の様態の一端を明らかにすることを試みる。

3. 研究の方法

第一期の江戸後期の綴織に関しては、一次資料の中で現在綴織と呼ばれているものが何と表記されていたのか、そのような表記がいつ頃から現れてくるのかを調査し、それらの記述から浮かび上がってくることは何かを考えてゆく。また、日本製と中国製の年記が明らかな作品が伝来しているが、それらがどのくらいあるのか、生産地の裏付けが確実にとれる作品はどれかを明らかにしたい。さらに、この時期の日本・中国・ヨーロッパ製綴織を比較調査し、江戸後期に外来要素を吸収して綴織が形成された道筋の一端を明らかにしたい。

第二期の明治-昭和初期に関しては、この時代を代表する制作者を選び出して文献調査を行なう。また、海外において関連する技法の調査を行う。そして、綴織が産業美術品から純粋芸術作品に至る過程において、材質・技法・表現と外来要素がどのように関連していたかを考察する。

第三期に関しては、綴織を次第に壁から自立させて立体空間に展開していった戦後の織物作家に関して調べ、その中から代表的な作家を選び出す。できればインタビューを行い、海外に出て行った経緯などを聞き取ってゆく。そして、綴織から立体へと展開していった戦後の作家が外国の要素をどのように吸収して海外の動向と連動していったかを考察する。

調査方法としては、一次資料と実物資料の調査を組み合わせ、意匠や表現のみならず、材質や技法の面からも作品にアプローチしてゆく。さらに、作者が健在な場合は聞き取り調査も行い、作者の生の声を記録して考察材料とする。

4. 研究成果

本研究は、調査期間の後半がコロナウイルスの蔓延と重なった。この期間は戦後の作品を幅広く取り上げ、海外調査や作家のインタビュー等を行う予定だったが、コロナのためにそれが困難になった。そこで、期間の後半は戦後の作ではなく、江戸時代の作の調査に力をいれる方向に切り替えた。そのため本研究は当初の計画に比べると、戦後の部分が少なく、江戸時代の部分がやや多い結果になっている。

(1) 江戸時代後期

第一期の江戸後期は、中国やフランドルの綴織の諸要素を取り込みながら、日本で綴織が形成された時期にあたる。まず、綴織に関する表記などを一次資料の上で確認した上で、中国製やフランドル製の綴織と、それを模倣して日本で制作された品に関して検討した。

綴織の一次史料における表記

一次資料を調査したところ、以下が明らかになった。日本における絹製の綴織の名称には、以下があった。「襤褸錦」と記されて「つつれにしき」と読まれる場合や、「克絲」と記されて「くみものおり」と読まれる場合があった。また、「克絲」・「刻絲」・「綴錦」と書かれることもあり、

「綴錦」は「つつれのにしき」と読まれた。そして、「衲錦」と記されて「つづれのにしき」又は「つつれ」と読まれることもあった。さらに、天竺織と記されることもあったが、この語は主にオランダが舶載した毛製の綴織に用いられることが多かった。これらの表記の大半に「つつれのにしき」または「つつれ」というルビが振られていることから、書く場合は様々に表記されていたものの、それらは一般に「つつれ」と称されていたことがうかがわれる。『増補祇園会細記』（以下、『増補細記』と略称）にはこれらの表記が複数用いられているが、最も使用頻度が高いのは「綴錦」であり、中国製は「唐織綴錦」、日本製は「地織綴錦」と記されている。史料において「つつれ」という呼称は、18世紀半ばから19世紀半ばに現れてくる。この頃に日本で「つつれ」という呼称が用いられ始め、次第に定着していったことがうかがわれる。

次に、一次資料において確認できる日本製の綴織の最も古い年代を調べた結果、それは『祇園会占出山神具入日記』にある寛政六年だった。日本で綴織が織り始められた時期はこれより早いことは明白で、おそらく寛政六年を遡る18世紀後半のことと思われる。

日本製であることが裏付けられる作のうち、圧倒的多数を占めるのは、中国の画題を模倣あるいは表現した品で、これらの作に付随する年代は寛政年間から安政年間までに及んでいる。日本の綴織は中国の綴織を母体として形成されて発展してきたこと、この種の綴織は日本で18世紀末以降、幕末まで織り続けられていたことが、これらの作からうかがわれる。さらに、19世紀初頭に日本の画題が綴織に用いられ始め、日本独自の綴織の表現に向かっていったことが確認された。

中国製と日本製の綴織

中国製の綴織と、それを模して江戸時代に日本で制作され始めた日本製の綴織の多くは、日本の祭礼の中に伝来している。これらの作は江戸時代に綴織が制作され始めた初期の段階を示すものとして大変重要であるが、中国製のオリジナル作品と、それをモデルにして制作された日本製品を識別することが大変困難である。

そこで、史料などを詳しく検討したところ、中国の作を模倣しながら綴織の技法を学ぶ時期から、学んだ技法を用いて日本独自の表現を模索する時期へ転換しはじめるのは、『増補細記』が記された文化年間（1804-1818）の頃であることが浮かび上がった。また『増補細記』に記されている中国製と日本製の綴織のうち、中国製の13件と日本製の12件が今日も祇園祭に現存していること、『増補細記』には記されていないが、中国製ないし日本製であることが明らかな祇園祭の現存作例として、13件の中国製品と4件の日本製品があることが判明した。

さらに、祇園祭以外に目を向け、中国製・日本製であることが裏付けられる綴織の現存作例を探したところ、中国製が4件、日本製が7件上がってきた。このうち大津祭の龍門滝山の仙人図綴織見送、京都国立博物館蔵（前田家伝来）の唐花文様綴錦半切、国立歴史民俗博物館蔵の菊桐麒麟送子鳳凰模様綴織水引の3点は、井筒屋瀬平（林瀬平）との関連が想起される品として注目され、後者2点は会津で制作されたことがわかる重要な作例である。

フランドル製と日本製の綴織

京都やその近郊の祭礼には16世紀を中心とするフランドル製のタペストリーを模倣して江戸時代に制作されたと思われる綴織が伝来している。その代表作の一つである長浜祭に伝来する掛物を顕微鏡調査した。また、この種の掛物のモデルとなったと思われる、祇園祭に伝来するフランドル製のタペストリーも調査した。さらに、比較研究のために、ベルギー王立美術史博物館などにおいて、フランドル製のタペストリー、それを織り出した機、そしてその織技を調査した。その結果、以下の事柄が明らかになった。

ヨーロッパ製を模倣したこの種の作例は、その図様はヨーロッパの図様を踏襲しているが、細部にヨーロッパの図様としては不可解な変形などがみられる。そして、材質や技法に目を向けると、日本の祭礼に舶載された中国製綴織は経糸も緯糸も絹製であるのに対して、この種のフランドル製綴織は、経糸も緯糸も大半は羊毛製である。また、中国製の綴織は織り出された図様に対して、経糸が垂直方向、緯糸が水平方向に配されるのに対して、この種のフランドル製の綴織は経糸と緯糸の配置が逆で、経糸が水平方向、緯糸が垂直方向に配されている。

このことを念頭に長浜祭などに伝来するこの種の日本製の綴織を観察したところ、経糸と緯糸の材質や配置などはフランドル製のものに従っていることが明らかになった。経糸と緯糸の配置などは織機の構造や織技に関わる重要な事柄で、このことは日本の職人は図様や材質のみならず素材や織り方もフランドルのものを模倣したことを示唆している。

この種のヨーロッパ製綴織の日本における模倣は、日本の祭礼においては管見の限り織続けられた形跡がみられない。これに対して、中国製の材質や織技を踏襲した作は、当初は中国製の図様を模倣するものが多かったものの、次第に日本固有の主題（葵祭、日本三景図など）を表すものが現れ、表現内容が日本固有の内容に切り替わってゆくことが、作品調査から確認できた。日本人は19世紀には中国綴織とヨーロッパ綴織の双方を模倣していたこと、そしてそのうち中国の材質や技法を選択し、それを母体に日本独自の表現を確立していったことが調査を通して浮き彫りになった。

(2) 明治から昭和初期

第二期の明治から昭和初期には、外来要素を取り込んで、綴織が次第に美術作品化されていっ

た。明治から昭和初期の日本の綴織に関して調査を行ったところ、川島甚兵衛二世（以下、甚兵衛と略称）と山鹿清華（以下、清華と略称）の作に顕著な特徴が見られることがわかった。そのため、甚兵衛と清華に調査の焦点を絞ることにした。

川島甚兵衛二世

甚兵衛は、19世紀後半から20世紀初頭の日本における綴織の制作を先導した人物で、その契機となったのは1886年のゴブラン工房の視察だった。そこでまず、主に文献を中心に甚兵衛関係の作品調査を行った。そして、比較研究のためにパリのゴブランギャラリーなどにおいて、フランス製のタペストリーとその技法を調査した。

甚兵衛の綴織の多くは画家（日本画家・西洋画家など）が起こした図像に基づいている。そして、その綴織の大半は絹製で、織り出された図像に対して、経糸が垂直方向、緯糸が水平方向に配されている。甚兵衛は江戸時代に舶載された中国の綴織の技術的特徴を制作の基礎にしており、さらに日本とフランスの要素を折衷させて新たな綴織を立ち上げていったことが明らかになった。

山鹿清華

山鹿清華は昭和初期から日本の綴織制作の第一人者として活躍した。甚兵衛と清華が大きく異なる点として、甚兵衛の作は複数の職人の手によって制作されたが、清華は個人作家として制作の大半を自ら行ったこと、甚兵衛の工房では下絵を描く画家と綴織を織る織手の二分化があったが、清華はその二つを統合し、個人の自由な表現を追求しようと努めた点にある。

調査は主に、清華の実作品の顕微鏡調査を中心に行った。たとえば、「万寿山」という作において、清華はループ状の糸や太さが不均一な糸など、通常の形状とは異なる多様な形状の緯糸を使用し、さまざまなテクスチャー（触覚）を表現している。清華は絵画をなぞるといった綴織から離れて、絵画にはできない織物特有の表現を追求していた。清華は用途を持たない芸術表現としての織物を制作し始め、その際に表現の上で主要な役割を果たしたのがテクスチャーであり、それを下支えしたのは彼が選んだ糸の特殊な形成や材質であった。

（3）第二次大戦後（ファイバーワークを中心に）

第三期の第二次大戦後には、ヨーロッパでジャン・リュルサによって綴織（タペストリー）が再興され、ローザンヌでタペストリー・ピエンナーレが開かれ、タペストリーを純粋芸術に昇華させる試みがなされた。日本でも織物作家が育ちはじめ、海外の動向と連動しながら新たな造形（ファイバーワーク）へ向かっていった。

戦後の日本のファイバーワークを調べたところ、綴織を中心技法とする早期の代表的作家として小名木陽一があげられることを確認した。幸い、コロナ蔓延の初期であったため、小名木氏にインタビューすることができ、外来文化との関係を中心に聞き取りを行い、その言葉を記録して考察を論文にまとめた。

小名木氏は展覧会でイスラム文化の染織品を見て、繊維に染料が浸透して繊維の内部から発色する染織品の色彩の力に気づき、絵画の制作から離れて染織の世界に踏み込んだ。また、アンデス文化の綴織に魅了され、その単純化された図様や、赤を中心とする鮮烈な色使いに影響を受けた。さらに、氏は日本の染織史の上で等閑視されることが多かった庶民の生活文化に目を向け、特に藁の文化とその用品に着目した。氏の仕事は、アンデスの綴織に触発された平面の仕事から、日本の藁の文化を背景とする立体作品へと姿を変えていった。

ローザンヌピエンナーレにおいて小名木氏が高く評価されたのは、欧米作家と同じ地平に立ってタペストリーの立体化の問題に深く考えをめぐらせる一方で、それらとは文脈を異にする日本の藁の文化を掘り起こし、さらにイスラムやアンデスの染織文化の要素を取捨選択しながら取り込んで、時間軸や空間軸の上に個別に存在してきた多様な文化の織物の特性を独自の方法で融合させて斬新な造形へ昇華させた点にあることが、インタビューから浮かび上がった。

まとめ

本研究の結果、3つの時期の綴織における外来要素の受容の様態が浮かび上がってきた。江戸時代の末には、日本人は中国の綴織とフランドルの綴織を模倣していた。そして、そのうち中国の綴織を自らの基本技法として選択し、日本独自の表現に向かっていった。また、明治期の綴織を代表する川島甚兵衛二世の仕事は、日本の要素にヨーロッパの要素を加えて発展させたものと見られることが多かった。だが、時代ごとの枠組みを取り外し、俯瞰的な視点から綴織の発展史の一部としてその仕事を考察した結果、中国、日本、フランスの要素を複合して独自の表現を形成しようと試みていたことが浮かび上がった。

また、戦後の小名木陽一においては、ヨーロッパの動向に触発されて新たな表現に向かうにあたり、ヨーロッパや日本のみならず、イスラムやアンデスといった複数の染織文化の要素を氏独自の方法で複雑に混交させており、それがヨーロッパの作家には見られない独自の表現に至る大きな要因の一つとなっていた様態が明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 吉田雅子	4. 巻 65
2. 論文標題 小名木陽一における工芸文化の受容と展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 27-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 吉田雅子	4. 巻 64
2. 論文標題 日本に伝来する17-19世紀の綴織—中国製・日本製の裏付けがとれる現存作例を探して—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Masako Yoshida	4. 巻 -
2. 論文標題 Tapestries Brought to Japan through the Maritime Silk Road and Their Influence	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Association for the Study of Silk Roads Textiles 3rd Symposium Proceedings	6. 最初と最後の頁 56-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉田雅子	4. 巻 62
2. 論文標題 一次史料から見る日本製の江戸時代の綴織	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉田雅子	4. 巻 66
2. 論文標題 祇園祭の役行者山に伝来する唐子嬉遊図の織の水引をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 33-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masako Yoshida	4. 巻 -
2. 論文標題 The Global Influence of China and Europe on Local Japanese Tapestries Mainly from the 19th through 20th Centuries	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Textile Society of America 16th Biennial Symposium Proceedings	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 2件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Masako Yoshida
2. 発表標題 Comparison of Chinese and Japanese Tapestries Produced Mainly in the 17th through 19th Centuries and Handed down in the Gion Festival in Kyoto
3. 学会等名 International Association for the Study of Silk Roads Textiles (IASSRT) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masako Yoshida
2. 発表標題 The Global Influence of China and Europe on Local Japanese Tapestries mainly from the 19th through Early 20th Centuries
3. 学会等名 Textile Society of America 16th Biennial Symposium (TSA) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masako Yoshida
2. 発表標題 Tapestries Brought to Japan through the Maritime Silk Road and Their Influence
3. 学会等名 International Association for the Study of Silk Roads Textiles (IASRT) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masako Yoshida
2. 発表標題 Textile, Clothing and Accessories of the Interactive Atlas of Cultural Interactions along the Silk Roads
3. 学会等名 United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO) Expert Meeting (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2021年に開催された祭屋台等制作修理技術者会研修会に招待され、「染織品の調査や新調を通して考えたこと」という題目で講演を行ない、本研究を通して得た作品の状態や修復保存に関する知見を、幅広く染織品の修理技術者に公開した。その内容は「染織品の調査や新調を通して考えたこと」という題目で『祭屋台等制作修理技術者会研修会報告書』2021、pp.17-29に掲載された。

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------